

ニュース & トピックス

ウクライナを知り、支援する取り組みを推進

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻に対し、3月に滋賀大学は平和的解決を求める声明を発表しました。また、ウクライナを支援する取り組みを行っています。



ノビ・ソチ市立図書館の日本の絵本コーナーにて

ウクライナ避難民の子どもたちへの「絵本プロジェクト」

ポーランドへ逃れたウクライナ避難民の子どもたちに日本の絵本をおくる「絵本プロジェクト」を、京都信用金庫とともに実施。3月28日～4月15日に、同金庫本店をはじめとする85拠点で絵本とメッセージを受け付けました。4月28日に行われた記者会見では、産学公連携推進機構の近兼敏客員教授が活動と今後の展開について説明したほか、ポーランド

で避難民の支援活動を行う坂本龍太郎さんが、オンラインで現地の様子などを報告しました。今回集まった絵本は約750冊。3ヵ月かけてウクライナの子どものための避難先に送られ、その1つであるポーランド共和国のノビ・ソチ市立図書館には日本の絵本コーナーが設置されました。



オンラインでの打ち合わせの様子

絵本「へいわって どんなこと？」をウクライナ語で配信

ウクライナのドニプロ国立大学で日本語を学ぶ学生3名と本学の学生6名が、絵本「へいわって どんなこと？」(浜田桂子作、童心社)のウクライナ語翻訳と、YouTubeによる読み聞かせ配信を行いました。4月にオンラインで2大学が打ち合わせをした際には、絵本の作者である浜田さんも参加し、浜田さんやドニプロ国立大学の学生たちから

話を聞きました。その後、3つのグループに分かれて翻訳作業を行い、5月にYouTubeで公開した動画は、6月末終了を延長し、9月30日まで配信。また8月にはロシア語翻訳も完成し、配信を始めました。翻訳活動に参加した学生らが、彦根市内の中学校で今回の経験を語るなど、学内だけでなく地域においても、平和について考える機会となりました。



受け入れに伴う記者会見の様子

ウクライナから避難学生2名の留学を受け入れ

絵本「へいわって どんなこと？」のウクライナ語翻訳、読み聞かせプロジェクトに参加したウクライナの学生のうち、本学への留学を希望したアンナ・ブチェロボドヴァさんと、カテリーナ・イグナトバさんを受け入れました。ウクライナで暮らす人たちに、少しでも心穏やかな時間を過ごしてほしいと、本学では茶道や華道、禅といった日本の文化をウクライナ

語で紹介する動画制作プロジェクトを進行(下のQR)。この制作に二人も参加しました。二人は経済学部の一員として、日本語や経済学を学び、大学院への進学をめざします。



禅



茶道



華道

ウクライナ支援募金ご協力をお願い

本学では今後も、ウクライナからの避難学生の受け入れを進めるなど、より直接的な支援に取り組んでいきます。現在、活動支援への募金を受付けています。詳細は大学ホームページからご確認ください。

ウクライナ支援募金の詳細はこちら



【教育学部】

■「おとさぼ」アールブリュット展「Quintet! vol.2」開催

教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぼ」が、独創的なアート作品を生み出し続けるアートセンター＆福祉施設「やまなみ工房」の作家5名の展覧会「やまなみ×おとさぼアールブリュット展Quintet! vol.2」を開催しました。やまなみ工房は、甲賀市にある世界的なアールブリュットの工房で、この福祉事業所に通う

約90名はアーティストとして個性あふれる作品を生み出し、国内外で高い評価を受けています。本展では5名による作品を、作家の個性を含め紹介。アートとして楽しめるだけでなく、多様性を尊重する社会について考える機会となりました。



■3年ぶりに学内レガッタ大会を開催

関西みらいローイングセンター(滋賀県立琵琶湖漕艇場)にて、第70回学内レガッタ大会が行われました。本行事は、瀬田川の近くに立地している教育学部ならではの行事です。昨年度、一昨年度は新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、今年度は感染症対策を徹底し、3年ぶりに開催することができました。当日は教育学部生50名ほどが参加し、漕艇部の掛け声に合わせて、一生懸命漕いでいました。

【経済学部】

■学生発案の「思わず欲しくなる自働具」完成発表会 開催

春学期授業「プロジェクトB(モノづくりプロジェクト2022春『思わず欲しくなる自働具を作ろう』)」では、ひこね自働具開発工房の協力を得て、自働具※の構想から制作までの一貫した授業プログラムを行いました。学生同士の共同作業だけでなく、モノづくりの発想やデザインの意味について考え、工作用道

具の使い方も学びました。また、実際にモノづくりをすることで、自身のもつ身体感覚を再確認することをねらいとしています。完成発表会では、片手でも開けられるボトルキャップオープナー、目の不自由な方も遊べる木製遊具など学生が制作した自働具が披露されました。



■経済学部と(一社)生命保険協会が教育連携開始－秋学期に寄付講座を開講－

経済学部と一般社団法人生命保険協会は、金融リテラシー向上や保険業界の実務的な知識を習得した人材育成を目的とし、寄付講座の開講に関する覚書を締結しました。関西では本学経済学部が初の連携となります。今回の連携において、保険市場における理論と実践に精通する実務家教員による専門科目を新たに開講。カリキュラムの一層の充実を図り、18歳成人となった今後の社会で必要とされる知識・考え方の習得をめざします。

【データサイエンス学部】

■VRで高齢者交通事故分析し、歩行者の挙動をデータ化

歩行中の高齢者が事故に遭う原因を突き止めるため、データサイエンス学部・川井明准教授のゼミでは、滋賀県警などと協力してVR(仮想現実)を使った高齢歩行者の挙動分析を試みています。高齢者らに車が走り抜ける道路での横断をVRで体験してもらい、横断時の体の動きを

データとして集め分析し、なぜ高齢者が多くの事故に遭うのか、原因の究明に挑んでいます。EBPM(証拠に基づく政策立案)の視点を取り入れ、高齢歩行者の事故の減少に向けた対策の高度化につながる取り組みです。



■近江テック・アカデミーの執行役員にデータサイエンス研究科学生が就任

彦根商工会議所、彦根市、滋賀大学、地元企業や金融機関によるコンソーシアム「近江テック・アカデミー株式会社」でのインターンシップをきっかけに、データサイエンス研究科の上野義博さんが同社執行役員に就任。彦根市中央町にあるテレワークオフィス「INSPIRLAKE」の運営を学生主導で行っています。今後は、地域ジュニアに対する統計教育講座や、地域事業所に対するDX導入支援も予定。「連携をより深いものにしていきたい」と上野さんは語ります。

※自働具とは、何らかの障害や病気などによる麻痺、加齢による身体機能の低下などを原因とする動作の不自由を補うための道具や装置のこと